

## ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動：その全体像と「民族主義的」特色：補説 フィヒテ協会と雑誌『ドイツ民族性』

竹岡，健一  
鹿児島大学

<https://doi.org/10.15017/26523>

---

出版情報：九州ドイツ文学. 25, pp.27-54, 2011-10-12. 九州大学独文学会  
バージョン：  
権利関係：

# ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動

— その全体像と「民族主義的」特色 —

補説 フィヒテ協会と雑誌『ドイツ民族性』

竹 岡 健 一

## はじめに

本論文は、ワイマール時代からナチ時代にかけてのドイツにおける民族主義的思想の普及に貢献した読書共同体「ドイツ家庭文庫」<sup>1)</sup>に関する研究の補説として、同文庫の母体をなす商業職員労働組合「ドイツ民族商業補助者連合（DHV）」<sup>2)</sup>の教育活動の全体像と「民族主義的」な特色を明らかにし、それによって、DHVの教育活動が、資本主義的大経営の発展とプロレタリア運動の高まりの中で、中間的身分の確立を希求していた保守的な商業職員の間にも広範な影響を及ぼし、1930年代前半のドイツでナチズムが受け入れられる素地の形成に貢献したことを明らかにしようとする試みである。

DHVでは、商業の分野や労働組合の枠を超えた幅広い活発な教育活動が行なわれた。そのうち、主にDHV内部で行われた活動については、別稿<sup>3)</sup>ですでにその組織と特色を明らかにしている。本稿で取り上げるのは、一般教養教育的な活動に関する補足説明であり、連合の下部組織ともいうべき「フィヒテ協会」を舞台に展開された活動に焦点を当てる。具体的には、まずフィヒテ協会そのものについて、成立と理念、DHVとの関係、主な活動、地方への広がりや発展を述べ、次いで協会の機関紙である『ドイツ民族性』に関して、成立、構成、記事、執筆者、保守革命的な思想を論じ、さらにフィヒテ協会とナチズムのかかわりについて、ナチズムへの期待と齟齬、およびフィヒテ協会の終焉を扱う。

## 1. フィヒテ協会

### 1-1. 成立、理念、およびDHVとの関係

1915年8月と1916年1月、雑誌『舞台と世界』*Bühne und Welt*において、一つの団体を設立するための綱領が発表された。その主旨は次のようなものである。ドイツでは、ビスマルクによって成し遂げられた政治的統一が、精神の領域で達成されていない。第一次世界大戦の経験は、ドイツが将来偉大な国家として持ちこたえるためには、基本的に外国の要素の影響を受けぬ新たな国家の理想を明らかにすることに取りかからねばならないことを示した。それを援助することが、新しい協会の課題である。<sup>4)</sup> — 綱領の起草者は、この雑誌の編集者であり批評家として著名なヴィルヘルム・キーファーであった。また、およそ16人の人物が署名をしており、その中には、法律史家のゲオルク・フォン・ペロウ、郷

土芸術運動の代表者アードルフ・バルテルスとフリードリヒ・リーンハルト、作曲家で指揮者のジークフリート・ワーグナー、哲学者のヒューストン・スチュワート・チェンバレン、芸術史家のヘンリー・トーデなど、反ユダヤ主義的で国家主義的・民族主義的な人々が含まれていた。また、この他に協会の設立に携わった人物として、同様の傾向を持つ作家のフリッツ・ブライとエルンスト・ヴァハラールや、脚本家で映画監督のハンス・フォン・ヴォルツォーゲン、それに DHV で指導的な役割を果たしていたクリスティアン・クラウス、アルフレート・ロート、アルベルト・ツィンマーマンなどがあげられる。こうして、1916年5月10日、ハンブルクにおいて、「1914年のフィヒテ協会」Fichte-Gesellschaft von 1914 が誕生したが、この名称には、協会の理念が端的に表れている。まず「1914年」という年号は、第一次世界大戦が勃発した1914年の8月に出現したような民族の力と団結をドイツ人の間に再び呼び覚まそうという意図を示しており、この点、綱領には次のように記されていた。

私たちは、1914年8月に神聖な信仰の期待のごとくドイツを襲った体験の高みに留まらねばなりません。戦争の中で千倍にも固められたあの体験は、未来の平和のための仕事にとって命令となるに違いないのです。<sup>5)</sup>

一方、ヨハン・ゴットリープ・フィヒテの名は、ドイツ国民に自らの国民的特長の再認識を求める強い訴えである。ナポレオンによるプロシア占領下において、1807年から翌年にかけて『ドイツ国民に告ぐ』という一連の講義を行い、世界の指導者となるべく運命づけられたドイツ国家の使命と、それに対処すべくドイツ人が自らの独自の性質を自覚する必要性を説き、新たな国民教育の計画を提唱したフィヒテの名声は、ドイツにおける国家主義の増大とともに高まり、当時一種のフィヒテ＝ルネサンスといった様相を呈していたのであった。<sup>6)</sup>

ところで、こうして成立したフィヒテ協会は、形式的には一個の独立した組織であるが、実質的にはその存在を DHV の支援に負っていた。具体的な事例をあげると、DHV は、ホルステンヴァルにある連合のビルのオフィスを協会に無料で提供し、協会の幹部の給料を支払った。また、協会の宣伝のためのパンフレットは、DHV の印刷機によって、最小限のコストで作成された。協会がハンブルクに、成人のための夜間学校としてフィヒテ大学を設立できたのも、DHV の物質的支援に拠るものであり、フィヒテ大学の指導者の給与も DHV から支払われた。協会設立の綱領が掲載された雑誌『舞台と世界』も、DHV が1916年に元の出版社から買い取ったものであり、1917年1月からは『ドイツ民族性』と改名され、協会の機関誌として、DHV の出版部門であるハンザ同盟出版社から刊行された。地方における協会の活動においても、DHV の地方支部が核となった。さらに、フィヒテ協会の中央事務所は1926年にシュパンダウのヨハネ財団に移されたが、そこはまさに DHV が「職業身分養成セミナー」を開催していた場所であった。——だが、それではなぜ DHV はフィヒテ協会に対してそれほど多くの支援を行ったのだろうか。その理由は、DHV が協会を自

らの民族主義的な教育の有望な協力者と見なしていたことにある。この点について、アルベルト・ツィンマーマンは次のように述べている。

この理由（民族の他の階層への影響＝訳者注）から、DHVの代表者らはフィヒテ協会の設立に積極的に協力しました。この理由から、私たちは協会に活動の場を自由に使わせました。この理由から、私たちの国家政策部門は、協会と手を携えて活動しました。フィヒテ協会は、私たちドイツ人はなるほど帝国を形成してはいるが、民族を形成しておらず、それゆえ、苦境が極度の忠誠を要求するときに役立つのだということに注意を喚起しました。フィヒテ協会は、フィヒテの意味で、つまりドイツ理想主義の精神において、ドイツ人をドイツ人の民族共同体の建設へと結集させようとしています。フィヒテ協会は、ドイツ人の教育の公の道具を、つまり、学校、演劇、新聞雑誌、芸術と芸術の仲介、書物と講演をドイツ的なものにするのを支持しています。

連合のフィヒテ協会との協力により、自ずから、連合の出版企業であるハンザ同盟出版社がますます広い基盤の上に立たされることにもなりました。もともと、一連の企業が並行して歩んでいました。つまり、印刷所、連合の書店、フィヒテ協会出版社、ドイツ民族出版社、ドイツ民族性出版社、冷蔵産業のための出版社、ハンザ同盟芸術出版社などです。あるとき、この混乱に満足できないあるひょうきんな男が、私たちに、連合に編入された経済的企業の案内書を印刷して出版するよう求めました。私たちはそれはしませんでしたが、すべてをまとめて、ハンザ同盟出版社に統一しました。それによって、連合が誇りとする、大きな、100万マルクの株式資産を有する企業が、つまり一方では連合の印刷所をなしますが、他方では私たちの運動の精神的な兵器庫以上の意味を、DHVの精神的な力を、DHVの原則と努力を、私たちの連合の境界内外のきわめて広い領域に通用させるための手段以上の意味を持つ企業が成立したのです。

企業全体は、目下およそ150人の人を雇っています。そこには、とりわけ『ドイツ商業の番人』が印刷される大きな印刷機があります。その上さらに、12の高速印刷機、9つの凸版印刷機、5つの植字機、4つの切断機などがあります。こうした技術的な補助手段を備えた製本所が、印刷所と結びついています。印刷所は、連合の雑誌と書籍刊行物を製造するだけではありません。それは大ハンブルクの領域内外に数多くの個人の顧客を持っており、その中には、一流の大企業も含まれています。

ハンザ同盟出版社の本来の出版活動は、多数の雑誌の周りに集まっています。そこには、すでに述べた、勇敢なヴィルヘルム・シュターペル博士によって編集されるドイツ人の精神生活のための月刊誌『ドイツ民族性』もあります。この雑誌は、私たちの連合の境界をはるかに越えて尊敬され恐れられる精神的な力となりました。と同時に、『ドイツ民族性』は、フィヒテ協会の活動から生まれた出版物に一つの基盤をもたらしました。<sup>7)</sup>

このように、フィヒテ協会は、精神的にも物質的にも DHV と切り離せない存在だったのである。

## 1-2. 主な活動

では、このフィヒテ協会では、具体的にどのような活動がなされていたのだろうか。このことを知る上で最初にあげたいのは、雑誌『若きドイツ人の声』の1920年12月号に掲載された協会の広告である。

フィヒテ協会は、党派的情熱の覆いを突き破ります。それは、政治的な日々の戦いの中でその力を使うのではなく、民族のあらゆるグループの男性女性と一緒に、すべての層の人々を民族の運命共同体に対する責任と忠実さへと計画的に教育することで、あらゆる国家体制に不可欠な基礎を創る仕事をしています。

フィヒテ協会は、これを次のようにして達成します。

- ①雑誌『ドイツ民族性』と『若きドイツ人の声』において、ドイツを意識した文化意志とドイツを意識した政治という目標を代表することによって。
- ②それなくしてはあらゆる実践的な政治の仕事が道を誤るに違いない民族主義的な信条の基礎を学識者と労働組合員が協力して維持している、ハンブルクで活動しているドイツ共同体政策のための指導者学校を通じて。
- ③目標を意識したドイツ的政策だけがその実行に必要な反響を得る信条のグループを形成することを助けるという目標を持った、協会とともに直接的な作業共同体を行っている100の市民大学における大規模に構想された民族教育によって。
- ④ドイツの演劇が新たに創設され、民芸と民俗が新たに好まれるようにするドイツ劇場協会の活動を通して。
- ⑤汚れたものや低俗なものに反対してドイツの本とドイツの絵を飽くことなく擁護することによって。
- ⑥ドイツの未来の浮き沈みを決する世代として「若きドイツ人同盟」(20万人の会員)の中に結びついた民族主義的な青年運動との緊密な作業共同体によって。

ドイツの未来の戦線の集合地点に、あなたの場所はまだ空いています。私たちはあなたに呼びかけ、あなたは逃げることはできません。歴史がいつかあなたを無責任と呼ぶことをお望みでないなら。<sup>8)</sup>

ドイツ民族の再生に懸ける熱意がよく表れた文面であるが、フィヒテ協会ではそれを、刊行物、学校、市民大学、ドイツ的な文化の擁護、および青年運動といった多様な活動を通じて達成しようとしていたのである。だが、これらすべてについて詳細が明らかになっているわけではなく、他方で、これら以外にも協会の活動と見なされるものは存在する。そこで、以下では、ここにあげられたものとあげられていないものを含めて、協会の主な活動のうち、ある程度内容を具体的に把握できるものを見て行くことにしたい。

## (1) フィヒテ大学

フィヒテ大学は、成人のための夜間学校として1917年にハンブルクに設立された。社会民主主義的な市民大学に対抗して、民族主義的な基盤に立ち、「精神と肉体の両面でドイツ人の身体を健康にし強め」、「ドイツ人の民族性を未来に対して確かなものにする」<sup>9)</sup>ことを目標としており、市民大学設立の呼びかけにおいて、次のように謳っていた。

私たちは、私たちの文化の放棄し得ぬ真の財産は、それらが民族性の中に生き生きと根を下ろしているときにのみ繁榮するというきわめて深い認識を持つドイツ的な男性と女性を育てることを欲します。ありがたいことに、私たちドイツ人は、外国の教育目標を借りる必要がありません。というのも、自らの独自の力と独自の価値から発展するのに、ドイツ人ほど相応しい民族は、他にいないからです。「人類を幸福にする」国際性という見せかけ、決まり文句、嘘など去るがよいのです。ドイツ人の魂は、私たちの脅かされた民族性を護るのに十分な価値を生みます。丁度私たちの指導者フィヒテもこう言っています。「個性溢れる真面目さ、道徳的な気高さ、内面的な精神性については、いかなる民族も私たちとは比べ物にならない。したがって、再生全体が、またそれとともに全人類の再生が、そこから生じなければならないのだ。」——市民大学は、フィヒテの要求に倣って、生徒たちを、「その最も深い表現が宗教に、その最も高度に仕上がった形が芸術に、その最も確固たる意志の欲求が世界観に見出されるようなドイツ的な生が湧き出る泉へと導く」つもりです。<sup>10)</sup>

フィヒテ大学で行われた授業の主な分野は、哲学、歴史、言語、文学、法律、経済、美術、演劇、ダンス、体操などであり、教授や講師といった指導者は、ハンブルクに住み、非常勤で勤務した。最初の学期は1917年9月に、700人の人々を会員として開かれた。次にあげるのは1919年の授業一覧であるが、全体として民族主義的な傾向を持つことがわかるであろう。なお、「作業共同体」とは、参加者が相互の意見交換を通して議論を深め、熱意や仲間意識を培いながら、ドイツ民族性に立脚した世界観を身につけて行くための、少人数のグループ活動である。<sup>11)</sup>

### 1. 哲学

1. ヴィルヘルム・シュターペル博士：カント哲学の基本概念に関する作業共同体
2. エーミール・エンゲルハルト：フィヒテ哲学への最初の入門
3. エーミール・エンゲルハルト：J.G. フィヒテの現代の諸特徴 作業共同体 1
4. エーミール・エンゲルハルト：J.G. フィヒテの現代の諸特徴 作業共同体 2
- 5-7. 2、3、4に関する作業共同体
8. エーミール・エンゲルハルト：シラーの哲学的な詩 作業共同体

### 2. 歴史

9. テーオバルト・ピーダー：ゲルマン研究の歴史からのイメージ

10. テーオバルト・ビーダー：ゲルマン人の部族学
  11. テーオバルト・ビーダー：タキトウス『ゲルマーニア』 作業共同体
  12. ヴァルター・クラッセン：1815年～1850年
  13. ヴィルヘルム・デトレフセン：百年前のドイツの崩壊と再建 作業共同体
  14. ヴィルヘルム・デトレフセン：1848年のフランクフルト国民会議
  15. ヴィルヘルム・デトレフセン：ドイツ史の転換点 I
3. ドイツ語
16. ローベルト・ガルベ：低地ドイツ語の文法
4. 文学
17. ヴィルヘルム・シュターペル博士：『ニーベルンゲンの歌』 作業共同体
  18. フランツ・ハイベン：ドイツの民間童話とその文学の様式
  - 19-20. エーミール・エンゲルハルト：リヒャルト・ワーグナーの『ニーベルンゲンの指輪』の登場人物
  21. エーミール・エンゲルハルト：リヒャルト・ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』 作業共同体
  22. エーミール・エンゲルハルト：『ヘーリアント』 作業共同体
  23. ルートヴィヒ・ベニングホフ博士：ドイツの伝説1 ヴィーラント伝説 作業共同体
  24. ルートヴィヒ・ベニングホフ博士：ドイツの伝説2 ヒルデとグドルーンの伝説 作業共同体
  25. ルードルフ・ヴェルナー博士：イブセンの社会劇
5. 芸術、音楽、演劇
26. ヴィルヘルム・シュターペル博士：芸術作品の考察に関する作業共同体
  27. ルードルフ・ヘルメス：デューラーの木版画シリーズ『ヨハネの黙示録』『大いなる受難』 作業共同体
  28. ルートヴィヒ・ベニングホフ博士：レンブラントのドイツ芸術 作業共同体
  29. シュヴァイントラツハイム教授：芸術的な見方を訓練するための遠足
6. 宗教的問題と生の様式
30. エーミール・エンゲルハルト：エッカーマンとの対話によるゲーテの世界観と人生観 作業共同体
  31. エーミール・エンゲルハルト：リヒャルト・ワーグナーの作品における愛の経験
  32. エーミール・エンゲルハルト：新しいドイツ家庭
7. 文化問題
33. エルンスト・ドプリッツ：在外ドイツ人の戦いと苦境 作業共同体
8. 女性問題
- 21、25、31、32を参照

## 9. 教育問題

34. ハンス・ナーゲル：フィヒテの教育思想から見た古い学校と新しい学校

## 10. 憲法、法律、慣習

36を参照

## 11. 国民経済

35. ハンス・キンダー：国民経済的思想への入門 作業共同体

36. ルードルフ・ヴィーゼナー：ドイツ国民経済の成立

37. ルードルフ・ヴィーゼナー：国民経済における重要人物

38. ルードルフ・ヴィーゼナー：ドイツの大都市 作業共同体

## 12. 民俗舞踊、リズム体操

### a. 民俗舞踊コース

39. レニ・テーガー

40. パウラ・シュリヒトクルル

41. パウラ・シュリヒトクルル

42. エミーリエ・ラドゥシュ

43. エミーリエ・ラドゥシュ

### b. リズム体操

44. 中級者向け

45. 初心者向け

46. 初心者向け<sup>12)</sup>

なお、実現したかどうかは明らかではないが、1920年10月には、「私たちの生の創造的な基盤からの再生」をもたらす「蘇生の施設」<sup>13)</sup>として、市民大学の宿泊所を田舎に建設するための呼びかけもなされており、その主な目的は、「都会の人々を集め、大都市を通じて直接的で生き生きとした土着の文化との接触をすっかり失った彼らを再び故郷の大地に移植し、彼らが新たな活力を得て、都会の共同体において、故郷との結びつきから新しく目覚めた人々の先駆けとして活動するようにする」<sup>14)</sup>ことであった。

## (2) 講演活動

フィヒテ協会では、フィヒテ大学においてのみならず、外部の学校等でも講演を行っていた。そのため、ハンブルクの本部に「講演部門」が設立されていたが、講演者は、ベルリン、ミュンヘン、ケルン、イェナなどにもおり、多くは——人物名は明らかでないが——大学教授や学校教師、青少年指導者、作家などであった。講演のタイトルとしては、例えば次のようなものがあげられ、フィヒテ大学の授業とほぼ同様の傾向を持っていた。

マイスター・エックハルト  
ルターの人格



キリスト教精神の真実

最も理想的な世界観とは何か

宗教的経験としての国民性の経験

カントの人生と仕事におけるドイツ的要素

フィヒテとドイツ精神の再生

ヘーゲルの国家観

言語と国民性

ドイツの抒情詩と詩人

ドイツ芸術の本質

レーテルからベックリンに至るドイツ・ロマン主義の名匠

演劇と国民性

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの叙事詩に対するワーグナーの『パルツィファル』の関係

ベートーヴェン<sup>15)</sup>

### (3) 雑誌の刊行

フィヒテ協会では、ドイツ民族的な信条を広くドイツ国民の間に普及させるため、二つの雑誌を刊行していた。その一つは、「ドイツ人の精神生活のための月刊誌」という副題を持つ『ドイツ民族性』Deutsches Volkstum: Monatschrift für das deutsche Geisteslebenであり、協会の機関誌として1917年から刊行された。これについては、後に詳しく考察する。もう一つは、「真の民族共同体建設のための回状」という副題を持つ『若きドイツ人の声』Jungdeutsche Stimme: Rundbriefe für den Aufbau einer wahrhaften Volksgemeinschaftである。この雑誌は1919年から刊行され、もっぱら青少年教育に関連する内容が扱われた。詳細は別の機会に論じることとするが、上記の広告の⑥にある「若きドイツ人同盟」の機関誌とも位置づけられるものである。協会が支援を行ったこの同盟は、第一次世界大戦後のドイツにおける最も右翼的な青少年団体であり、DHVの青少年団体とも深い関わりを持っていた。<sup>16)</sup>

### (4) 「ドイツ劇場協会」設立への参加

フィヒテ協会は、1920年にハンブルクで「ドイツ劇場協会」Verein Deutsche Bühneの設立に参加することで、活動の領域をさらに広げた。この協会では、ドイツ人の性格の肯定的な側面が描かれていると考えられる古典的な演劇と歌劇、具体的にはクライスト、ゲーテ、シラー、ワーグナーなどが上演された。また、1921年8月の時点で、会員数は3,000人を超えていた。<sup>17)</sup>

### (5) 「ドイツ民族教育会議」の後援

フィヒテ協会は、1924年から1931年の間に6回開催された「ドイツ民族教育会議」を後

援した。第1回会議の案内状によれば、この会議の目的は、ドイツ人の「民族的・政治的  
生活の基盤を明らかにし」、それによってフィヒテの意味での「国民教育」を促進すること  
であった。<sup>18)</sup> 会議は、一般の人々も参加する形で、2日から4日の日程で開催され、主要  
テーマに関する講義と討論を中心に進められた。各会議の日時、場所、主要テーマは次の  
通りである。

第1回 1924年10月2日～5日 ハンブルク

テーマ：国家と民族性

ライプツィヒ大学のフェーリクス・クリューガー教授が基調講演を行い、ドイツ人  
には「自らの国民的な個性と政治の調和」を見出すことが求められているが、ワイマル  
共和国はその答えではないとした。つづいて、その解決策として、ウィーン大学の  
社会学教授オトマール・シュパンが、ドイツ人が外国の「自由主義的・個人主義的な」  
民主主義を取り除き、民族性の「有機的形成物」としての国家を築くことを提案した。

第2回 1926年3月5日、6日 ハレ

テーマ：キリスト教精神と国民教育

マルブルク支部の指導者である牧師カール・ベルンハルト・リッター、ヴェルテ  
ンベルクのカトリック的な成人教育の指導者ハインリヒ・ゲツェニー博士、エアラン  
ゲン大学のプロテスタント理論の教授パウル・アルトハウス博士が主な講演を行い、  
国家は神の意図を部分的に実現するものであり、ドイツ国家の存在もこのキリスト教  
理論に基づいて正当性を保証されるのであるから、フィヒテの意味における国民教育  
はキリスト教的方向性を持たねばならないとした。

第3回 1927年3月6日～9日 ハノーファー

テーマ：大都市がその住民の性格に及ぼす影響

人々が大都市の人工的で興奮した環境へと移動することにより、ドイツ人の「民族  
的な」起源が、すなわち農民的な大地との結びつきや家族の連続性が失われつつある  
ことを懸念し、「国民教育」は、都市の大衆の孤立と道徳的墮落を軽減する努力をせ  
ねばならないとした。

第4回 1928年10月20日～22日 リューベック

テーマ：個人の道徳的義務感

ヴィルヘルム・シュターベルが主な講演を行い、個人の道徳的義務感は、功利主義  
的な打算によって獲得できる感覚ではなく、有機的な国家への帰属意識と密接に関連  
しているとした。また、マルブルクのリッターは、ドイツ人の偉大な部分は、そう  
した国家との深い結びつきに憧れていると述べた。

### 第5回 1929年10月26日、27日 ライプツィヒ

テーマ：所有と義務

ロストック大学のプロテスタントの神学者フリードリヒ・ブルンシュテット教授が主な講演を行った。経済的なテーマの中で、フィヒテ協会のキリスト教的な方向性が強調され、健全なドイツ社会のダイナミズムを提供するのは国家のアイデンティティーの感覚と結びついた宗教的理想主義のみであるとして、資本主義的な私有財産でも社会主義的な生産手段の私的所有の禁止でもなく、個人の所有を地域共同体によって引き出された財産と考える「ドイツ＝キリスト教的な財産の概念」が提唱された。

### 第6回 1931年4月25日、26日 ベルリン

テーマ：宗教と政治のかかわり

著名な新保守主義の作家アウグスト・ヴィンニヒが基調講演を行い、ドイツの知識人の指導者層は、社会的平等や非宗教的な唯物主義といった外国の影響から離れ、「生まれつき」指導の才能を賦与された人々に率いられる、神を志向する「国家共同体」というドイツ的な概念へと方向転換した、と述べた。<sup>19)</sup>

## 1-3. 地方への広がり与发展

以上のように、全体として民族的な基盤に立ち、生来の指導者に導かれる有機的でキリスト教的な国家共同体の建設を目指して活動したフィヒテ協会は、本部が置かれたハンブルク支部を中心に全国的な広がりを持っていた。その組織は、大きくはノルトマルク、オストマルク、ザクセン＝チューリングゲン、ヘッセン、バイエルンという五つの地区に分かれ、それらの中に大小の地方支部があった。例えば、リューベック、ベルリン、ポツダム、ロストック、ライプツィヒ、ドレスデン、ミュンヘン、ブレスラウ、デュッセルドルフ、エアフルト、フライブルク、カールスルーエ、ベルゲドルフ、カッセル、マルブルク、コンスタンツ、マインツ、マンハイム、シュトゥットガルトなどである。また、オーストリアのウィーンにも支部があった。これらの支部では、毎月または隔月で、ドイツの文化的遺産の評価を高めるための講義や討論が行われ、ライプツィヒとベルゲドルフとカッセルには、ハンブルクに倣ってフィヒテ大学が設立されていた。ここで、特に活動が活発だった三つの支部について簡単に触れておきたい。

### (1) ライプツィヒ支部

地方支部のうち最も大きく重要なのは、ライプツィヒであった。指導的な役割を果たしたのはライプツィヒ大学の心理学研究所所長フェーリクス・クリューガー教授であり、1920年代に心理学者として名を成すと同時に、「ドイツ精神」の熱心な擁護者として、本務以外の名声も博していた。

ライプツィヒ支部は約100人の会員で構成され、音楽、文学、哲学などの催しを後援し、

「ドイツ劇場協会」の活動も盛んだった。だが、最も主要な事業はハンブルクのモデルに倣ったフィヒテ大学の活動であり、1920年代中頃には、毎年数千人の入会者を数えていた。ハンブルクと同じように、学校の役員は給料を DHV から支払われ、教授陣は非常勤で、多くはボランティアとして、数人の参加者を連れて大学から訪れた。授業内容は主に文化的なもので、キリスト教的・国家主義的な価値が強調された。また、ライプツィヒ支部の最も活動的な会員はブルーノ・ゴルツ博士であり、フィヒテ協会のために、エッチング、リトグラフ、木版画の作品集を作成した。

### (2) マールブルク支部

マールブルクでは、正式な支部が設立されるよりかなり前から、「ドイツ学生寮」Deutsche Burse と称する団体の指導者ヨハン・ヴィルヘルム・マンハルト博士が、フィヒテ協会の活動に熱心に協力していた。この団体は、学生寮と教育事業が組み合わされたもので、分散したドイツ国民の文化的結束を促すことに関心を持っていたマールブルク大学の「国境と外国のドイツ性研究所」から後援を受けていた。マンハルトは、『ドイツ民族性』の初期の寄稿者でもあり、フィヒテ協会の理事会のメンバーでもあったが、同様に、フィヒテ協会のほうも「ドイツ学生寮」の活動を大いに支持し、その活動の宣伝を行った。

その後、マールブルクで協会の正式な支部の活動が活発となったのは、それまでベルリン支部を率いていたルター派の牧師カール・ベルンハルト・リッターが会長となった1925年からである。

### (3) ベルリン支部

ベルリン支部では、リッターがマールブルクに去った後、フィヒテ協会においても、ドイツ青年運動の国家主義的な諸団体においても名を知られていたハインツ・デーハルト博士が会長を務めた。上に述べたように、1926年以後フィヒテ協会の中央事務所がハンブルクからベルリンへ移ったのは、デーハルトが協会の経営管理人も務めていたためである。また、デーハルトは DHV と関係の深いヨハネ財団に活動の基盤を持ち、その支援を受けて、ベルリンで、ヴェルナー・プライステとともに、小規模ながら、「民族市民の教育」(17頁参照)を施すための学校を設立した。

こうして、フィヒテ協会は、DHV の継続的な支援を受けながら、ドイツ民族的思想を普及させるための重要な媒体として発展していった。DHV は、協会の活動を通して、学校、大学、劇場、新聞雑誌、成人教育、講演といった「民族的教育の道具」<sup>20)</sup>を、自らの戦いのための「精神的な参謀本部」<sup>21)</sup>としようとしたのである。

フィヒテ協会は、それ自体の会員数は1920年代末期でも約3,200人に留まったが、影響力は決して小さくなかった。雑誌『ドイツ民族性』は数千人の購読者を持ち、その多くは協会の会員以外の人々であった。「ドイツ劇場協会」も、ハンブルクとライプツィヒに数千人の会員を持っていた。また、一連の「ドイツ民族教育会議」にも、毎回2,000人から3,000

人が参加した。さらに、フィヒテ大学には、ハンブルクとライプツィヒだけでも、40,000人から50,000人が入学した。<sup>22)</sup> そしてなによりも、フィヒテ協会の活動は、その母体をなす DHV が数十万人の会員に対して行った教育活動に多大な影響を及ぼしたのである。

最後に、1930年時点でのフィヒテ協会の指導部のメンバーをあげると、次のような人々であった。

幹事長 クルト・ヴェルマン

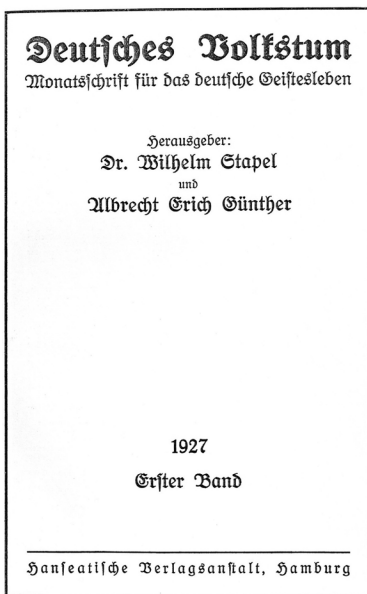
幹事長代理 ヴィルヘルム・シュターペル

事務局 郡長ヘルベルト・フォン・ビスマルク、牧師カール・ベルンハルト・リッター博士、商人アードルフォ・ブンディエス、マックス・ハーバーマン (DHV)、ベンノ・ツィーグラール (DHV)、騎士領領主ハンス・フォン・ヴェーデマイアー＝ピーツィヒ、ヨハネス・ティース医学博士、ヴェルナー・ブリースター博士 (シュパンダウのヨハネ財団)<sup>23)</sup>

## 2. 雑誌『ドイツ民族性』

### 2-1. 成立

雑誌『ドイツ民族性』は、ベルリンのエルスナー社から出版されていた『舞台と世界』を前身とする。1898年に創刊され、演劇と音楽と文芸を扱ったこの雑誌は、出版者の没後、1913年10月1日に DHV によって買い取られ、1917年に『ドイツ民族性』という新しいタイトルで、フィヒテ協会の機関誌として、DHV の出版社から刊行されたのである。具体的には、1917年から1919年にかけては、「ドイツ国家的出版社」から、1919年からは、新たに設立された姉妹出版社「ドイツ民族性出版社」から、さらに、この出版社が「ドイツ国家的出版社」と「フィヒテ協会出版社」とともに「ハンザ同盟出版社」として統合されて以後は、同社から刊行された。また、1932年4月までと1935年1月以降は月刊で、その間は隔週で刊行された。編集に関しては、1918年までは、『舞台と世界』の責任者であった批評家のヴィルヘルム・キーファーが携わったが、1919年からは、これまでも名前があがった保守革命の思想家ヴィルヘルム・シュターペルに交代した。とりわけ1925年には、DHV はハンザ同盟出版社内部に「民



『ドイツ民族性』1927年第1号の表紙

族性部門」を設け、その部長をシュターベルに委ねるとともに、『ドイツ民族性』をその部門の活動の中心に置いた。<sup>24)</sup> さらに、翌1926年からは、シュターベルと同様の思想傾向を持つアルブレヒト・エーリヒ・ギュンターが共同編集者となった。

## 2-2. 構成、記事、執筆者

『ドイツ民族性』の構成は、キーファーが編集に携わった最初の二年間は『舞台と世界』の形式に倣っていたが、シュターベルが引き継いで以後は、概ね次のようになった。

- 1 大きな論文 (Große Aufsätze) : 各巻の主要テーマを扱う。
- 2 精選 (Erlesenes) : ドイツの作家の文芸作品の抜粋。
- 3 小さな寄稿 (Kleine Beiträge) : 時局に対する根本的取り組み。
- 4 観察者 (Der Beobachter) : 寸評。
- 5 新しい本 (Neue Bücher) : 新刊書の書評。
- 6 対話 (Zwiesprache) : 読者との対話。
- 7 巨匠の声 (Stimmen der Meister) : 作家・思想家の名言<sup>25)</sup>

これらのうち、雑誌の中心をなすのは、各巻の主なテーマを扱う「大きな論文」の欄であった。ここで、その典型的な事例として、1933年上半期の6冊から、「大きな論文」の執筆者名とタイトルをあげる。

大学教授パウル・アルトハウス博士：法律と救済

カール・グスタフ・ビットナー博士：帝国と国家

ハンス・ボークナー博士：アダム・ミュラーの神学的国家観

大学教授グイード・ボルトロット：団体システムにおける大衆と国家 民族国家としてのファシズム国家

パウル・デーネ：東方国家とのフランスの軍事条約

大学教授アルベルト・ディートリヒ博士：民族生活と民族学 マックス・ヒルデベルト・ベームの著書『自律した民族』に関する考察

エルンスト・ドーマイアー博士：学問の未来

リヒャルト・ビリンガーに関する三つの声 (ヨーゼフ・デュニガー、アルベルト・エーリヒ・ギュンター、クルト・マッティエス)

パウル・エルンスト博士：詩人とその経験

大学教授カール・シュヴァイラー博士：十戒と自然法 ヴィルヘルム・シュターペル博士への手紙

同：新しい帝国における教会

エルンスト・フェルバー：現代の社会的カトリック主義における自由主義的要素と保守的要素

- フーゴー・フィッシャー博士：現実への接近と政治的哲学  
 大学教授オスヴァルト・フレック博士：フリードリヒ・フォン・ガーゲルン  
 ヴァルター・フランク博士：フリッツ・フォン・ホルシュタイン  
 ハインリヒ・ゲツェニー博士：ローマ・カトリック主義の社会的告知  
 大学教授フリードリヒ・ゴーガルテン博士：教会の自律性  
 アルベルト・エーリヒ・ギンター：破壊者としての男性 エルンスト・ユンガーの  
 著書『労働者』について  
 同：あるアフリカの法律  
 同：東と西 ドイツとフランスの軍事的合意  
 同：新しい国家  
 同：統制  
 大学教授ルードルフ・ギンター博士：アグネス・ミーゲル  
 ハインリヒ・ヘーン博士：画家ルードルフ・シーストゥルの芸術  
 ヒルデガルト・ヘーン＝エルテル：オデュッセウスとパルツィファル  
 エルンスト・ルードルフ・フーバー博士：同業組合に関する法律  
 エルンスト・ユンガー：没落か新たな秩序か  
 大学教授ルートヴィヒ・ユスティ博士：民族性と公共の美術品収集  
 オイゲン・カルクシュミット：どうだい、ヨナタン兄貴  
 オスカー・カルバッハ：控えめに考察したユダヤ人問題  
 大学教授クリスティアン・ヤスパー・クルムカー博士：自助集落  
 クレメンス・ラング：ユダヤ的なフランス  
 ヘルムート・ランゲンブッハー博士：カシミール・エトシュミットとドイツの運命  
 エーバーハルト・ルッツェ博士：古きニュルンベルクの絵画  
 アルベルト・ミルグラウ博士：法律、帝国、および改革  
 大学教授ルートヴィヒ・シェーマン博士：オイレンブルクのフィリップ  
 大学教授カール・シュミット博士：近代国家の権力を握る位置  
 ハンス・ショーメルス：カルヴァン派の人間  
 同：教会と帝国 旧ドイツ帝国議会での議席としての教会  
 ヴィルヘルム・シュターペル博士：ラジオ政策  
 同：ユダヤ教徒、異教徒、およびキリスト教徒 大学教授アルトハウス博士と大学教  
 授カール・シュヴァイラー博士への返事  
 同：帝国 結びの言葉  
 同：抑圧的政策か  
 同：パウロ・エルンストの戯曲について ドイツの劇場の混乱に関する覚書とともに  
 同：断固たる文化政策  
 同：学問、芸術、および民族教育  
 同：外交と宣伝

ヴィル・フェスパー：グルクの大聖堂

パウル・ヴィットコ：ルードルフ・G・ビンディング<sup>26)</sup>

なお、ここでは詳細は省くが、その他の欄の小さな記事も決して内容的に「大きな論文」に劣るものではなく、ハインリヒ・ケスラーによれば、同時代の作家コルベンハイヤーなどは、「何冊もの当時の国家的出版物よりも革命的な効果を及ぼした」<sup>27)</sup>と評しているほどである。また、各巻には、「ドイツ民族性から」と題して、図版が幾つか添えられた。上と同じ1933年上半期の6冊に掲載されたものをあげると次のようなものであるが、シーストゥルの絵画やグルクの大聖堂など、「大きな論文」の記事で扱われた芸術を視覚的に示しているものも見られる。

エーリヒ・ヘッケル：海の上の聖母

ルードルフ・シーストゥル：家族像、歌う若者

マックス・スレフォークト：ルートヴィヒスハーフェンのフリーデン教会内の十字架像、プファルツでの五月の収穫

ダイクスラー祭壇の殉教者聖ペトロ、トゥッハー祭壇の受胎告知

ブルクの大聖堂の百柱の地下聖堂、ブルクの大聖堂内の『天国』

ファルケンシュタインのクーノの墓碑、オリンピアのゼウス寺院のアポロの頭<sup>28)</sup>

最後に、上記の記事の著者を含め、この雑誌の主な執筆者としてあげられるのは、次のような人々である。

- 1 雑誌『舞台と世界』から：ハンス・フォン・ヴォルツォーゲン、ルートヴィヒ・シェーマン、カール・グルンスキー。
- 2 雑誌『芸術の番人』から：ヘルマン・ウルマン、ゲオルク・クライバーマー、オイゲン・カルクシュミット、レオポルト・ヴェーバー、カール・ゾーレ。
- 3 ハンブルクの「フォルクスハイム」から：ヴァルター・クラッセン、ハインツ・マル、アルフレート・プファラー。
- 4 青年運動のキリスト教的・民族主義的一派から：ヴィルヘルム・シュテーリン、カール・ベルンハルト・リッター、ヒャルマル・クッツレープ、ハインツ・デーネハルト、ヴェルナー・プライスター、ハンス・テスケ。
- 5 その他この雑誌に集結した民族的・国粹的詩人、作家、学者：アルトゥール・ディンター、ディートリヒ・エッカルト、ヒューストン・スチュワート・チェンバレン、アードルフ・バルテルス、ヴィルヘルム・コツデ、ハインリヒ・プードル、エルンスト・ヴァハラ、ヴェルナー・ヤンゼン、エーバーハルト・ケーニヒ、フリードリヒ・リーネハルト、アーダルベルト・ルントフスキー、ハンス・フォン・ヴォルツォーゲン、フリッツ・ブライ、ヘルマン・ブルテ、リヒャルト・



シャウケル、ゲルハルト・ギュンター。<sup>29)</sup>

### 2-3. 保守革命的思想

最初の編集者キーファーが、第1巻の基調論文で、「我々の活動の力の目標と源は民族性であり、我々の国家的生活に生氣を与え、より高く導く一切のものが、その中に根を下ろしている」<sup>30)</sup>と述べた通り、『ドイツ民族性』の思想的中心をなすものは「民族性」であった。だが、その後、この雑誌には「保守革命」という新たな要素がつけ加わった。シュターペルは、『ドイツ民族性』は「ワイマールにおける支離滅裂な集まりによって受け入れられたヴェルサイユ条約の奴隷の鎖を断ち切るための努力を喚起し」、「民族と帝国における敗北主義的で不穏な力を制圧しようと努力」する「闘争の雑誌」<sup>31)</sup>であるとしたが、この「闘争」は、国内においては議会政治、経済国家、政党国家、スローガン政治、主知主義、唯物主義、アメリカニズムなどに、そして対外的には世界政治、ヨーロッパ的思想、国際法、自決権、民主主義、自由主義、人文主義、平和主義などに向けられ、それらに代わって「ドイツの習慣、ドイツの権利、ドイツの教育、ドイツの信仰、ドイツの秩序」<sup>32)</sup>といった思想が据えられた。このような傾向は、マルクス主義（共産主義）と西欧自由主義を、またそのドイツの形態であるワイマール共和国とそれを強要したヴェルサイユ条約を激しく批判し、民族と共同体、および強力な国家の実現を目指した「保守革命」ないし「新保守主義」の思想と共通点が多いのである。<sup>33)</sup> 実際、出版元のハンザ同盟出版社自身、1932年に、『ドイツ民族性』を「保守的＝革命的ナショナリズムの重要な闘争の文書であり、攻撃において鋭く、批判において仮借なく、時代の精神的、政治的、経済的問題と対決する」と規定している。<sup>34)</sup> また、後世の文芸批評においても、『ドイツ民族性』は、「民族保守主義運動にとって大変重要な機関誌」<sup>35)</sup>、「新保守主義のメガホン」<sup>36)</sup>などと評され、『行動』、『良心』、『輪』、『ヨーロッパ評論』、『抵抗』といった雑誌と並んで、この思想潮流の中で重要な役割を果たしたと見なされているのである。<sup>37)</sup>

ところで、『ドイツ民族性』のこの保守革命的な傾向は、主としてヴィルヘルム・シュターペルの影響に拠る。シュターペルは、1882年に生まれ、1911年にゴシック様式の彫刻に関する芸術史的研究で学位を取得し、ジャーナリストとなった。シュトゥットガルトで出版された雑誌『観察者』の編集に携わった後、1912年11月に、フェルディナント・アヴェナリウスの雑誌『芸術の番人』に協力し、間もなく編集者となり、この雑誌と関係が深い「デューラー同盟」でも指導的な立場を引き受けた。しかし、その後1916年にアヴェナリウスとの個人的な不和が元で退き、1917年からは、プロテスタント系の神学者・教育者で、反ユダヤ主義者でもあるヴァルター・クラッセンによってハンブルクに設立されたセツルメント施設「フォルクスハイム」で活動した。そして、第一次世界大戦の経験から、社会的問題の解決を共同体の思想と民族性のイデオロギーに求めるようになり、フィヒテ協会、『ドイツ民族性』、およびDHVの政治教育などに深く関わることになった。彼は、上記のようにフィヒテ大学で講師を務め、協会の機関誌『ドイツ民族性』の編集に携わったのみならず、書籍シリーズ『フィヒテ大学』を刊行するなどした。<sup>38)</sup> また、DHVにおいて

も、その政治教育や、出版社であるハンザ同盟出版社の活動、とりわけ「ドイツ家庭文庫」の顧問や「文化政策部門」の指揮を担当した。<sup>39)</sup>

このようなシュターペルが『民族市民の教育』(1917年)や『キリスト教的政治家』(1932年)などの著作で表明した保守的な思想の特色は、とりわけ民族概念の重視、メシア的な指導者の希求、ヨーロッパにおけるドイツ人の覇権といった点にある。<sup>40)</sup> 彼は、民族は国家と政治から独立して成長し発展する、有機的で生物学的な形成物であり、止揚し得ない自然の共同体であるとする一方、国家は、民族のその都度の状態を保持する手段に過ぎないとし、民族の一部としての個人に向けられるべき「民族市民の教育」の必要性を説く。また、このような民族重視の態度は、現実の政治のレベルでは、リベラルで民主主義的な選挙を否定し、民族のメシアとしての指導者を希求するという形をとる。彼によれば、民族というものは、特殊な政党や経済的利益の代表者ではなく、真の指導者が決定的な影響力を持つときにのみ健全なものであり、来るべき未来の指導者は、軍人精神に溢れ、カリスマ的指導力を持ち、支配者・戦士・僧侶の三位一体的な存在とならねばならないのである。さらに、シュターペルにとっては、ドイツ人は他の民族と同等な存在ではない。ドイツ人であるということは、神が聖なる現実性と尊厳に包まれて民族のもとに降臨する日を待ち望む比類なき民族に属していることを意味しており、したがって、ドイツ人によって指導されるヨーロッパだけが満足し得るヨーロッパである。ヴェルサイユの平和秩序が支配するヨーロッパは、ドイツ人が弱体化したために病んでいるが、ドイツ人によってこそ覇権は握られるべきなのである。

むろん、こうした思考はいささか抽象的で非合理的な側面を含んでいる。だが、まさに反主知主義や反合理主義といったものも、シュターペルの思想のもう一つの特色である。前近代的で非合理的な民族的調和という考えは、彼においては、民族主義とは異質な要素の影響を被ったワイマール共和国の体制と知識人、およびユダヤ人に対する嫌悪の根柢をなしていた。シュターペルにとっては、知識人にはその精神的態度ゆえに、ユダヤ人にはそのアイデンティティーゆえに、ドイツ民族の共同体感情が拒まれているのである。そして、その意味で、彼は、第一次世界大戦直後のドイツで進行していた政治的革命を偽りの革命と呼び、フリードリヒ・エーベルトによる臨時政府もワイマール共和国も共に正道を踏み外したものと見なし、ドイツがその地位を再建するために必要なのは、西側の民主主義的原理をモデルとした革命ではなく、革命を保守主義的価値の新たな肯定へと転換させることだと主張した。<sup>41)</sup>

こうして、『ドイツ民族性』を含めたフィヒテ協会の活動全体は、「ワイマール時代の最も有名な民族性理論家」<sup>42)</sup>であるシュターペルの保守革命的な思想に貫かれていた。のみならず、それが本論で扱った DHV の第18部門による一般教育活動の思想的基盤ともなっていたことは、そこで「民族市民の教育」という目標が繰り返し掲げられていたことから明らかである。また、連合の機関誌『ドイツ商業の番人』は、すでに1917年、『ドイツ民族性』を唯一のドイツ民族主義的な雑誌として歓迎し、文学的関心を持つすべてのドイツ民族商業補助者に推薦していたが<sup>43)</sup>、それに加えて、その後の DHV の出版活動全体がシュ

ターペルの影響をいかに強く受けていたかは、1927年の連合の年鑑に印刷された「ハンザ同盟出版社の民族性部門の課題」から証明される。その第1条において、「ハンザ同盟出版社は民族保守主義的な思想に奉仕する」<sup>44)</sup>とされているのである。

### 3. フィヒテ協会とナチズム

#### 3-1. ナチズムへの期待

これまで述べてきたように、フィヒテ協会は、ヴェルサイユ条約に対する反発、民主主義や自由主義の否定、マルクス主義的共産主義に対する憎悪、反ユダヤ主義、有機的な価値観の支持、生来の指導者の希求といった考え方をもち、ドイツ人の民族性に基づく共同体の建設のために尽力したが、それが同時期のナチズムの運動と共通点を持っていたことは言うまでもない。それゆえ、フィヒテ協会の活動に参加した多くの人々は、ナチスの影響力が増大した1930年代初頭、彼らが抱く民族共同体のヴィジョンとヒトラーが掲げる第三帝国のそれを同じものと見なしたり、ナチ革命を保守革命の政治的実現のために必要な媒介物と考えたりすることによって、ナチズムを受け入れ、ヒトラーが政権を取ったとき、真の民族的国家への決定的な歩みが踏み出されたと信じたのである。

このことは、協会の代表的な人物の反応にも表れている。シュターペルは、1932年の『我々はナチズムに何を期待するか』において、来る政権が、党員か否かにかかわらず、民族主義的な考えを持つ名声ある知識人を利用することを期待し、『ドイツ民族性』の1933年9月号に掲載した「指導者性と規律 ナチ国家の理解のための論考」では、新政権の権威は「生まれながらの指導者性」と「本物の規律」の結びつきに基づいていると論じた。<sup>45)</sup> また、クリューガーは、1933年5月2日にライプツィヒ大学で行った講演で、ドイツ人男性の再生を含む新しい「ドイツの改革」が認められることへの希望を表明して、ナチ革命を迎えた。<sup>46)</sup> さらにマールブルクのマンハルトも、雑誌『ドイツの大学』の1933年第1号の論説「大学とナチズム」において、共同体全体の重要な要求と大学が一致する時代の到来を描いた。<sup>47)</sup> これら三人は、こうした強い期待を抱きながら、ヒトラーの成功を新しい民族主義的な国家への前進として受け入れ、新しいドイツのために、それぞれの立場で、民族主義的な名声が確立した知識人として尽くすつもりでいたのである。

だが、そのような期待は思い違いであった。彼らは、ナチ運動の狂信性と勢いをあまりにも過小評価していたのである。そして、ナチズムに対する好意的な気持ちにもかかわらず、ナチスはその歩みを加速するにつれて、彼らは新政権を全面的に受け入れることから遠ざかって行き、ナチズムの積極的な代弁者となることはなかった。ここで、シュターペルを中心に、三人がナチ政権成立後に辿った経過やナチスとの対立点について跡づけておきたい。

#### 3-2. ナチズムとの齟齬

シュターペルは、民族主義的・国家主義的な革命を求める過程で、すでに1933年以前か

ら、ナチズムを健全な民族的本能の表れとして賞賛し、ヒトラーの中に真の指導者を見出していた。彼は、『キリスト教的政治家』（1932年）の最初の版を、「ドイツ人の指導者に」という献辞を添えてヒトラーに贈呈しており、また1936年11月21日に「新しいドイツの歴史のための帝国研究所のユダヤ人問題研究部門」で行った講演でも、「ドイツの精神が1933年に政治的権力を獲得していなければ、ドイツの文化は異文化の過度の影響に屈していただろう」<sup>48)</sup>と述べている。一方、ナチスの側でもシュターペルを評価し、例えば1933年、機関紙『民族の監視人』は、『ドイツ民族性』を次のように称えた。

『ドイツ民族性』は、国家的に保たれた良い雑誌であり、国家的な基礎から新しいドイツを建設しようとする流れに応じようと努めている。この月刊誌は、特に文化政策的な観点できわめて多くの重要な事柄を提供している。<sup>49)</sup>

こうしたシュターペルの活動、とりわけ『ドイツ民族性』がナチズムと緊密な親和性を持つことは、後世の研究においてもしばしば指摘されている。<sup>50)</sup>

だがその一方で、1933年以後、シュターペルはナチスから様々な批判を受けることになる。その理由は、大きく二つあった。一つは、彼がナチ当局からの統制を嫌ったことである。例えば、ヒトラー親衛隊の雑誌『黒い軍団』は、1935年の4月と8月に、シュターペルは新たに生成しつつある国家の意志を妨害していると非難したが、その原因となったのは、彼が引き続き自立して活動しようとしたこと、具体的には、党にも帝国著作員にも加わらず、また『ドイツ民族性』をナチスと結びつけた雑誌として作り直すことを拒んだことにあったと考えられている。<sup>51)</sup> 事実、『ドイツ民族性』の1933年4月の最初の号で、シュターペルは次のように述べていた。

私たちの雑誌は国家主義的な革命を欲し、そのためにそれなりに協力してきました。確かに、すべてが私たちが考え望んだとおりににはならないでしょう。実現は願望と同じではないのですから。私たちは、国家主義的な革命から新たに成立した国家に対しても、すぐさま支持を表明しました。それは、私たちなりに、共に引き寄せたものなのです。〔中略〕しかし、私たちの雑誌はすべての党から自由でありつづけるでしょう。私は、自分がヒトラーを選んだことを隠しはしません。けれども、『ドイツ民族性』が党との結びつきを疑われぬよう、決してナチ党には入りませんでした。<sup>52)</sup>

また、もう一つの理由は、ユダヤ人問題に対する考え方の相違である。人種思想は、ドイツではすでに第一次世界大戦前から見られ、右翼の思想に大きな影響を与えていた。しかし、似非科学的な人種主義を宣伝したのはナチスと若干の分派だけであり、右翼インテリの大半は、ドイツ人の優秀性を、生物学的に規定できる要因よりも、歴史的＝文化的思想に根ざすものだと考えていた。彼らにとって、反ユダヤ主義はイデオロギーの要ではなく、ユダヤ人が世界の敵だというローゼンベルクの思想に同調する者はほとんどいなかっ

たのである。そして、シュターペルもまたこうした人々の一人であった。この点について、ローラント・クルツは、次のように述べている。

シュターペルの反ユダヤ主義の形は、ナチスやその他の民族主義的な形とはっきり区別されねばならない。彼はユダヤ人を追放しようとか、それどころか絶滅しようなどとは思わなかったし、人種やアーリア化の理念を支持することもなかったのだ。<sup>53)</sup>

人種理論に関するこのような見解の相違は、ローゼンベルクがルドルフ・ヘス宛の書簡において、シュターペルを「ナチズムの世界観的な敵」<sup>54)</sup>と呼んだことにも表れている。

しかしながら、このようなナチズムとの齟齬がナチズムに対する幻滅をシュターペルにどの程度もたらしたのかを見極めることは、決して容易ではない。一方では、1938年末に『ドイツ民族性』が中止に追い込まれたことをナチスによるシュターペルの実質的な追放と見なし、彼はヒトラー時代の残りを半引退の状態で過ごしたという見方がなされている。<sup>55)</sup> だが他方で、シュターペルは第二次世界大戦の開戦に至るまで一貫してヒトラーと第三帝国を支持したといった見方や、あるいは彼が第三帝国からキリスト教的＝保守的なドイツ帝国が生じるという希望を捨てたのは1944年に至ってのことだったとの見方もある。<sup>56)</sup> そしてなによりも、彼は「新しいドイツの歴史のための帝国研究所」での活動を1945年まで続けることが出来たのであり、それ以前に民族主義的信条に奉仕し、反ユダヤ主義的宣伝を行ったことで、親衛隊やローゼンベルクと衝突しながらも窮地に陥ることは避けられたとも見られているのである。<sup>57)</sup>

次に、クリューガーであるが、彼は、1935年4月にライプツィヒ大学の学長に指名された。ナチ党員ではないものの、著名な学者が指名されたことは、新しい秩序に威信が与えられるという意味で、ナチ当局にとって好ましいことであった。一方、クリューガー自身にも、新しいドイツにおける大学の役割について、自らの理想を成就する期待がもたらされた。しかし、彼は検閲制度に批判的になり、また講義において、ハインリヒ・ヘルツ、パウル・ハイゼ、メンデルスゾーン、スピノザらを気高いユダヤ人として称えるなどした。これにより、彼は早くも1935年末に学長の職を解かれ、さらに、その後の当局との衝突によって、1938年には大学を退職するに至った。

続いて、マンハルトの場合も、ナチ革命を歓迎した初期の熱狂は長く続かなかった。上記のように外国にいるドイツ人に対して特別な関心を抱いていた彼は、そうした人たちがヒトラー政権の政治的行動の中に直接関与させられていないことを公然と批判したのである。その行動は、マールブルクの党指導者による反対デモを引き起こし、それによって、彼は大学からも「ドイツ学生寮」からも追放されたのであった。

### 3-3. フィヒテ協会の終焉

シュターペルとクリューガーとマンハルトのこのような経験は、ナチ政権に対する期待から幻滅へと向かうフィヒテ協会の多数の会員の反応でもある。すなわち、1934年6月の

協会の会合では、まだナチスとの緊密な協力の希望が示されていたが、1937年9月の会合の議事録には、ナチスとのかかわりはもはやまったく記されていないのである。

こうして、1933年から1938年の間に、フィヒテ協会の活動は徐々に終息に向かった。ヒトラー政権成立後に協会が被った最初の大きな打撃は、DHVの消滅であった。DHVは、1933年5月10日に「ドイツ労働戦線」に吸収され、その後も、ナチスの指導者原理の取り入れ、名称の変更、会長の交代などを通じて独自の活動の可能性を探ったが、1934年10月24日に「ドイツ労働戦線」がナチ党の組織となったことにより、法人としての独立性を失ったのである。そして、1937年秋には、ハンブルクの本部と協会を脱会したベルリン支部を除いて、フィヒテ協会の組織はすべて消滅した。さらに、『ドイツ民族性』の最後の巻が刊行された1938年12月に、ハンブルク本部も解体を決定した。そして、1939年1月16日に最後の会合が開かれ、フィヒテ協会の解散の手続きが行われたのであった。

なお、ベルリン支部は、全国協会からの独立を宣言して以後、ゲッベルスとのつながりを深め、1939年には宣伝省の「書籍と民族」部門に編入され、文学的な講演プログラムの準備などに携わった。

## おわりに

以上、フィヒテ協会の活動を概観してきたが、市民大学、講演、雑誌といった多様な手段を用いて、民族主義的な基盤に立った国家共同体の建設のために尽力していたことがわかる。そして、それは同時に、協会の支持母体をなすDHVの教育活動の幅広さと「民族主義的」な特色を証明するものである。

こうしたフィヒテ協会とDHVの一体性は、両者が一貫して民族主義的・国家主義的な信条の普及に努めながら、ナチ政権成立後には統制を受け、活動の場を失ったことにも表れている。両者は共に、自らがナチ革命を招来したとの自負を持ち、第三帝国でこれまで以上に活動の場が広がることを期待したが、それはあまりにも楽観的な幻想だったのである。

しかし、ナチ政権成立後の成り行きはどうあれ、フィヒテ協会とDHVがナショナリズムの台頭に果たした一定の役割を否定することはできず、ここに、第一次世界大戦後のドイツにおいて、伝統的な保守的思想がナチズムと結びついた過程の一端を見ることができるのである。

## 付記

- (1) 本稿は、平成22年度より科学研究費補助金の支給を受けて進めている研究（基盤研究（C）、研究代表者：竹岡健一、課題名：第一次世界大戦後のドイツにおける民族主義的読書共同体〈ドイツ家庭文庫〉とナチズム、課題番号：22520320、平成24年度まで継続予定）の成果の一部をまとめたものである。
- (2) 本稿の執筆にあたり、平成22年9月6日から17日まで、ドイツ連邦共和国ライブ

ツィヒ市の「ドイツ国立図書館」とボン市の「フリードリヒ・エーベルト財団附属図書館」において調査を行った。貴重な蔵書の閲覧と複写を許可して下さった両図書館に対し、この場を借りて謝意を表す。

- (3) 本稿の内容の一部は、日本独文学会秋季研究発表会（平成22年10月10日 於千葉大学）において、口頭発表を行った。

## 注

- 1) 竹岡健一：「ドイツ家庭文庫」について — ワイマール共和国時代から第三帝国時代における右翼商業職員への読書指導の一端（研究同人誌『かいろす』第47号、2009年、84～104頁）、および竹岡健一：雑誌『かまどの火』について — ナチズムと文学メディアのかかわりに関する考察の新たな手がかりとして（日本独文学会機関誌『ドイツ文学』第116号、2004年、61～68頁）参照。
- 2) 竹岡健一：ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の歴史と活動 — 労働組合活動と政治的動向とのかかわりを中心に（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第71号、2010年、155～173頁）参照。
- 3) 竹岡健一：ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動 — その全体像と「民族主義的」特色 — 第I部 序論と職業教育（鹿児島大学言語文化論集『VERBA』第35号、2011年、91～112頁）、および竹岡健一：ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動 — その全体像と「民族主義的」特色 — 第II部 一般教育、青少年教育、および結論（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第74号、2011年、133～164頁）参照。
- 4) Vgl. Edmondson, Nelson: The Fichte Society: A Chapter in Germany's Conservative Revolution. In: The journal of modern history. University of Chicago: University of Chicago Press 1966, Vol. 38 (2), S. 161-180, hier S. 162f.
- 5) Zitiert nach ibid.
- 6) Vgl. Bussche, Raimund von dem: Konservatismus in der Weimarer Republik. Die Politisierung des Unpolitischen. Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter 1998, S. 226. および、ヘルマン・リュッペ（今井道夫訳）：ドイツ政治哲学史 — ヘーゲルの死より第一次世界大戦まで（法政大学出版局、1998年、207頁）参照。
- 7) Zimmermann, Albert: Der Deutschnationale Handlungsgehilfen-Verband. Sein Werden, Wirken und Wollen. Hamburg: Hanseatische Verlagsanstalt. [um 1928], S. 86f.
- 8) Jungdeutsche Stimmen, 1920 Heft 23/24, hinterer Buchdeckel.
- 9) Engelhardt, Emil: Die Fichte-Hochschule in Hamburg: Aufbau, Verwaltung und Arbeit: 1917 bis 1919. Hamburg: Verlag des deutschen Volkstum 1919, S. 14.
- 10) Ibid.
- 11) 詳細は、竹岡健一：ドイツ民族商業補助者連合（DHV）の教育活動 — その全体

像と「民族主義的」特色 — 第Ⅱ部 一般教育、青少年教育、および結論 (135頁、145~146頁) 参照。

- 12) Vgl. *ibid.*, S. 80-90.
- 13) Engelhardt, Emil: Das Volkshochschulheim auf dem Lande. In: *Jungdeutsche Stimmen*. 1920 Heft 19/20, S. 405-409, hier S. 408.
- 14) *Ibid.*, S. 409.
- 15) Edmondson, Nelson: a. a. O., S. 170.
- 16) 竹岡健一: ドイツ民族商業補助者連合 (DHV) の教育活動 — その全体像と「民族主義的」特色 — 第Ⅱ部 一般教育、青少年教育、および結論、を参照。
- 17) Vgl. Edmondson, Nelson: a. a. O., S. 169.
- 18) Vgl. *ibid.* S. 172.
- 19) Vgl. *ibid.* S. 172f.
- 20) Verhandlungsbericht über die Gründungstagung der Fichte-Stiftung am 18. 2. 1920 in Berlin. Zitiert nach Hamel, Iris: a. a. O., S. 131.
- 21) *Ibid.*
- 22) Vgl. Edmondson, Nelson: a. a. O., S. 175.
- 23) Vgl. Hamel, Iris: a. a. O., S. 130.
- 24) Vgl. Hamel, Iris: a. a. O., S. 141f.
- 25) Vgl. *Deutsches Volkstum*. 1927 Heft 1 – 1936 Heft 12; Nasarski, Gerlind: Osteuropavorstellungen in der konservativ-revolutionären Publizistik. Analyse der Zeitschrift „*Deutsches Volkstum*“ 1917-1941. Bern: Herbert Lang, Frankfurt am Main: Peter Lang 1974, S. 19.
- 26) Inhaltsverzeichnis von „*Deutsches Volkstum*“, 1. Halbjahr (von Januar bis Juni) 1933.
- 27) Keßler, Heinrich: Wilhelm Stapel als Politischer Publizist. Nürnberg: Spindler 1967, S. 6. Zitiert nach Nasarski, Gerlind: a. a. O., S. 19.
- 28) Inhaltsverzeichnis von „*Deutsches Volkstum*“, 1. Halbjahr (von Januar bis Juni) 1933. なお、「ダイクスラー」と「トゥッハー」は、それぞれ祭壇の製作の注文主の名である。
- 29) Vgl. Nasarski, Gerlind: a. a. O., S. 20; Hamel, Iris: a. a. O., S. 133.
- 30) Kiefer, Wilhelm: *Deutsches Volkstum*. In: *Deutsches Volkstum* 1917, S. 10. Zitiert nach Nasarski, Gerlind: a. a. O., S. 13.
- 31) Stapel, Wilhelm: Zwanzig Jahre „*Deutsches Volkstum*“. In: *Deutsches Volkstum* 1938, S. 797. Zitiert nach Nasarski, Gerlind: a. a. O., S. 19.
- 32) *Ibid.*
- 33) 保守革命ないし新保守主義については、蔭山宏: *ワイマール文化とファシズム* (みすず書房、1986年、164頁); ジェフリー・ハーフ (中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳): *保守革命とモダニズム — ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治* (岩波書店、1991年、55頁以下); および谷喬夫: *現代ドイツの政治*



思想——ナチズムの影（新評論、1995年、135頁）を参照。また、入手が遅れたため、本稿の執筆には十分活かせなかったが、保守革命と『ドイツ民族性』の関連を詳しく論じた文献として、Gossler, Ascan: *Publizistik und konservative Revolution. Das „Deutsche Volkstum“ als Organ des Rechtsintellektualismus 1918-1933.* Münster/ Hamburg/ London: Lit Verlag 2001 (Uni Press Hochschulschriften Bd. 122) があげられる。

- 34) Zitiert nach Kurz, Roland: *Nationalprotestantisches Denken in der Weimarer Republik: Voraussetzungen und Ausprägungen des Protestantismus nach dem Ersten Weltkrieg in seiner Begegnung mit Volk und Nation.* Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus 2007, S. 194.
- 35) Bracher, Karl Dietrich: *Die deutsche Diktatur. Entstehung, Struktur, Folgen des Nationalsozialismus.* 3. Aufl. Köln, Berlin 1970, S. 45. Zitiert nach Nasarski, Gerlind: a. a. O., S. 13.
- 36) Klemperer, Klemens von: *Konservative Bewegungen zwischen Kaiserreich und Nationalsozialismus.* München, Wien 1962, S. 135. Zitiert nach Nasarski, Gerlind: a. a. O., S. 13.
- 37) Vgl. Mohler, Armin: *Die konservative Revolution in Deutschland 1918-1932. Ein Handbuch.* Dritte, um einen Ergänzungsband erweiterte Auflage. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1989, S. 63.; Bussche, Raimund von dem: a. a. O., S. 217. およびジェフリー・ハーフ：前掲書（42頁以下）；谷喬夫：前掲書（135頁）；ウォルター・ラカー（脇圭平・初宿正典・八田恭昌訳）：ワイマル文化を生きた人びと（ミネルヴァ書房、1980年、108頁）参照。
- 38) Vgl. Kurz, Roland: a. a. O., S. 197.
- 39) *Ibid.*, S. 200. および、K・ゾントハイマー（川島幸夫・脇圭平訳）：ワイマル共和国の政治思想（ミネルヴァ書房、1976年、30頁）参照。
- 40) シュターペルの思想に関しては、次の文献を参照。Nasarski, Gerlind: a. a. O, S. 15ff.; Bussche, Raimund: a. a. O., S. 223ff.; K・ゾントハイマー：前掲書（55頁以下、225頁、235頁以下、258頁）；ウォルター・ラカー：ワイマル文化を生きた人びと（24頁以下）；ハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラー（後藤俊明・奥田隆男・中谷毅・野田昌吾訳）：自由と統一への長い道 I・II（昭和堂、2008年、I、516頁、II、25頁以下）参照。
- 41) Vgl. Edmondson, Nelson: a. a. O., S. 167.
- 42) Gerstenberger, Heide: *Der revolutionäre Konservatismus. Ein Beitrag zur Analyse des Liberalismus.* Berlin: Duncker & Humblot 1969, S. 79. この他、ヨースト・ヘルマントは、シュターペルを保守革命に心酔した「右翼左派」の一員であり「国民的ボルシェヴィズム」の代表者と呼び、モッセは「フェルキッシュ運動の指導者」と呼んでいる。（ヨースト・ヘルマント（識名章喜訳）：理想郷としての第三帝国——ドイツ・ユートピア思想と大衆文化——（柏書房）2002年、153頁以下；ジョージ・L・モッセ（植村和秀・大川清丈・城達也・野村耕一訳）：フェルキッシュ革

- 命——ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ (柏書房) 1998年、76頁参照。)
- 43) Vgl. Hamel, Iris: a. a. O., S. 127.
  - 44) Zitiert nach Meyer, Andreas: Die Verlagsfusion Langen-Müller. Zur Buchmarkt- und Kultur-politik des Deutschnationalen Handlungsgehilfen-Verbands in der Endphase der Weimarer Republik. Frankfurt am Main: Buchhändler-Vereinigung GmbH. 1989, S. 13.
  - 45) Vgl. Edmondson, Nelson: a. a. O., S. 176. なお、『ドイツ民族性』のナチスに対する支持表明については、小野清美：保守革命とナチズム (名古屋大学出版会、2004年、317頁) も参照。
  - 46) Ibid.
  - 47) Ibid.
  - 48) Zitiert nach Bussche, Raimund von dem: a. a. O., S. 230.
  - 49) Zitiert nach Kurz, Roland: a. a. O., S. 194f.
  - 50) Vgl. Nasarski, Gerlind: a. a. O., S. 20; Böttger, Siegwart & Fritsch, Werner: Deutschnationaler Handlungsgehilfen-Verband (DHV) 1893-1934. In: Fricke, Dieter (Hg. als Leiter eines Redaktionskollektivs) : Die bürgerlichen Parteien in Deutschland. Handbuch der Geschichte der bürgerlichen Parteien und anderer bürgerlicher Interessenorganisationen vom Vormärz bis zum Jahre 1945, Bd. 2, Berlin (Ost) 1968, S. 702-714, hier S. 708; Lokatis, Siegfried: Hanseatische Verlagsanstalt. Politisches Buchmarketing im »Dritten Reich«. Frankfurt am Main: Buchhändler-Vereinigung GmbH. 1992, S. 4. およびヤン・ベルク他 (山本尤・三島憲一・保坂一夫・鈴木直訳) 『ドイツ文学の社会史 上・下』(法政大学出版局、1989年、616頁) 参照。
  - 51) Vgl. Kurz, Roland: a. a. O., S. 200; Nasarski, Gerlind: a. a. O., S. 21.
  - 52) Zitiert nach Meyer, Andreas: a. a. O., S. 208. なお、シュターペルはDHVに関しても、ナチズムと一定の距離を保つことが必要だと考えていた。「次の時代には、ドイツの政治において、ナチズムの影響の強い増大が予想される。しかし、ナチズムは恐らく突破力に過ぎない。突破の後に初めて、ドイツの未来にとって決定的な前線が形作られるだろう。今日から見れば、二つの未来の前線を、国家ボルシェヴィズム的なものと国家保守主義的なものと呼ぶことができるだろう。暗示された発展から推論されるのは、第一に、DHVがナチズムと、それと結びつくことなしに、緊密な関係を持たねばならないことであり、第二に、ナチズムの後に来る前線に適応せねばならないことである。DHVは、その道徳的、国家的、職業身分的な理念を国家保守主義的な前線においてのみ貫徹できるだろう。(1931年6月19日の手紙。Zitiert nach Lokatis, Siegfried: a. a. O., S. 20f.)
  - 53) Kurz, Roland: a. a. O., S. 292f. Dazu vgl. auch ibid. S. 141. また、ジョージ・L・モッセ：前掲書 (310頁以下)；ウォルター・ラカー：ワイマル文化を生きた人びと (126頁) も参照。
  - 54) Zitiert nach Kurz, Roland: a. a. O., S. 200.

- 55) Vgl. Weiling, Christoph: Die „Christlich-deutsche Bewegung“. Eine Studie zum konservativen Protestantismus in der Weimarer Republik. Vandenhoeck & Ruprecht 1998, S. 326; Edmondson, Nelson: a. a. O., S. 176.
- 56) Vgl. Nasarski, Gerlind: a. a. O., S. 22; Kurz, Roland: a. a. O., S. 201.
- 57) ウォルター・ラカー (西村稔訳): ドイツ青年運動——ワンダーフォーゲルからナチズムへ (人文書院、1985年、138頁以下) 参照。

## **Die Bildungsarbeit des deutschnationalen Handlungsgehilfen-Verbands (DHV)**

—Gesamtbild und „völkischer“ Charakter—

Exkurs : Die Fichte-Gesellschaft und die Zeitschrift „Deutsches Volkstum“

Ken-ichi TAKEOKA

Diese Abhandlung ist Teil der Beschäftigung mit der Buchgemeinschaft „Deutsche Hausbücherei“, die 1916 vom deutschnationalen Handlungsgehilfen-Verband (DHV) gegründet wurde, und die in der Zeit der Weimarer Republik und des Dritten Reiches zur Verbreitung des völkischen Gedankens in Deutschland beitrug. Weiter wird versucht, das Gesamtbild und den „völkischen“ Charakter der Bildungsarbeit des DHVs zu analysieren, und damit festzustellen, dass die Bildungsarbeit des DHVs einen weitreichenden Einfluss auf die Gruppe konservativer Handlungsangestellter ausübte; einer Schicht, die zwischen der Entwicklung kapitalistischer Großunternehmen und der Stärkung der proletarischen Bewegung die Festigung ihres Mittelstandes wünschte. So behandelt der vorangehende Hauptteil dieser Abhandlung die Bildungsarbeit in den verschiedenen Abteilungen des DHVs, nämlich der Berufsbildungsarbeit, Allgemeinbildungsarbeit und Jugendarbeit. Der vorliegende Exkurs untersucht die Bildungsarbeit in der sogenannten ‚Unterorganisation‘ des DHVs, d. h. der Fichte-Gesellschaft und ihrem Organ „Deutsches Volkstum“.

Erstens wird die Fichte-Gesellschaft selbst genau betrachtet. Besonders geht es um Entstehung, Idee, Beziehung zum DHV, zentrale Tätigkeiten, Ortsgruppen und Einfluss. Diese Organisation, deren vollständiger Titel „Fichte-Gesellschaft von 1914“ lautete, wurde 1916 in Hamburg von Anhängern des völkischen, nationalistischen und antisemitischen Gedankens gegründet, um, wie beim Ausbruch des Ersten Weltkriegs, die Vereinigung der Deutschen und die Volkserziehung im Sinne Fichtes zu erreichen. Sie wurde vom DHV sowohl persönlich als auch materiell stark unterstützt. Ihre wichtigsten Tätigkeiten waren die Fichte-Hochschule, verschiedene Vorträge, die Herausgabe der Zeitschriften „Deutsches Volkstum“ und „Jungdeutsche Stimme“, Teilnahme am „Verein Deutsche Bühne“ und den „Tagungen für Deutsche Nationalerziehung“. Wegen dieser Tätigkeiten war der Einfluss der Fichte-Gesellschaft keinesfalls klein, obwohl sie bis zum Ende der zwanziger Jahre nur 3,200 Mitglieder zählte. Unter ihren Ortsgruppen betätigten sich Marburg, Berlin und Leipzig besonders aktiv.

Zweitens wird das Organ der Fichte-Gesellschaft „Deutsches Volkstum“ genauer berücksichtigt. Untersucht werden besonders Entstehung, Inhalt und Beiträger. In Bezug darauf wird auch die Gesinnung des Hauptherausgebers in Betracht gezogen. Diese Zeitschrift wurde 1917 von der Publikationsabteilung des DHVs, der Hanseatischen Verlagsanstalt, veröffentlicht. Ihr wichtigster

Redakteur war Wilhelm Stapel. Die Verfasser und die Artikel waren im Großen und Ganzen völkisch, nationalistisch und antisemitisch. Sie übten Kritik an Marxismus, Liberalismus, Internationalismus und am System von Versailles und der Weimarer Republik. Stattdessen propagierten sie das kommende Deutsche Reich als die völkische Gesellschaft. Diese Tendenz beruhte auf dem volkskonservativen Gedanken Stapels, dessen Eigenart in der Hochschätzung des Begriffs Volk, Sehnsucht nach einem messianischen Führer und Überlegenheit der Deutschen in Europa besteht.

Drittens wird die Beziehung der Fichte-Gesellschaft zum Nationalsozialismus in Erwägung gezogen. Es geht um ihre Gemeinsamkeiten und Unterschiede sowie das darauf folgende Erlöschen der Fichte-Gesellschaft. Die meisten Mitglieder der Fichte-Gesellschaft akzeptierten am Anfang der dreißiger Jahre den Nationalsozialismus, weil es viele Gemeinsamkeiten zwischen den beiden zu geben schien. Sie nahmen die Machtergreifung Hitlers als den Anfang des wahren Deutschen Reiches freundlich auf. Aber die Wirklichkeit verhielt sich ganz anders. Das zeigt der Fall Stapels sehr typisch. Unter der Gleichschaltung konnte er sich nicht mehr selbstständig betätigen. Auch sein kultureller Antisemitismus war anders als der fanatische Hass Rosenbergs. So ging die Tätigkeit der Fichte-Gesellschaft nach 1933 allmählich dem Ende zu. Im Dezember 1938 erschien das letzte Exemplar von „Deutsches Volkstum“. Im folgenden Monat löste sich die Fichte-Gesellschaft auf.

Aus dem Gesagten ergibt sich Folgendes: Die Fichte-Gesellschaft versuchte mit verschiedenen Mitteln zur Gründung des Deutschen Reiches als völkischer Gesellschaft beizutragen. Das beweist zugleich die Ausdehnung und der „völkische“ Charakter der Bildungsarbeit des DHVs, der die Fichte-Gesellschaft stark unterstützte. Diese Einheitlichkeit zwischen der Fichte-Gesellschaft und dem DHV bestand auch darin, dass sie sich konsequent um die Ausbreitung der völkischen und nationalistischen Gesinnung bemühten, und dass sie trotzdem nach der Entstehung des NS-Regimes ihre Tätigkeitsfelder verloren. Sie bildeten sich ein, die NS-Revolution mit verursacht zu haben, und hegten die Erwartung, dass sie im Dritten Reich noch mehr Möglichkeiten für ihre Betätigung finden könnten. Das war aber zu optimistisch. Trotzdem kann man schließlich nicht leugnen, dass die Fichte-Gesellschaft und der DHV eine gewisse Rolle bei der Stärkung nationalistischen Gedankenguts spielten. Und hierin könnte man einen Teil des Prozesses bestätigt sehen, bei dem der traditionelle konservative Gedanke und der nationalsozialistische in Deutschland in der Ära nach dem Ersten Weltkrieg zusammenflossen.